

# 高等学校における歌合のための手順書

## —— 短歌教育の実践 ——

鈴木章弘(国語科)

### 1 教科書の中の短歌

高等学校における短歌教育を考えるにあたって、まず手がかりとなるのが国語の教科書である。いくつかの教科書を見てみると、短歌に割り当てられているのはどれも数ページほど、収録されている歌も十首から多くて三十首くらいであらうか。

この限られた紙幅の中で、各教科書会社はさまざまな工夫を行なっている。「国語総合」なのか「現代文」なのか、科目によって違ってくるのだが、たとえば、歌人の選択についても誰を取り、誰を捨てるのか、工夫と苦心の跡が見受けられる。

筑摩書房『精選国語総合 現代文編 改訂版』では、幅広くオーソドックスな選定でありながらも、多くの教科書で採録している正岡子規をあえてはずし(筑摩書房 2017 pp.167-168)、教育出版『現代文B』では、斎藤茂吉をおさえつつも、ハンセン病患者の明石海人、第二次世界大戦で戦死した渡辺直己、全共闘世代の道浦母都子、在日韓国人二世の李正子を採録するなど、短歌の広がりに対する意識的な視線を感じることができる(教育出版 2018 pp.91-94)。

ただ数社の教科書を通読して言えるのは、どの教科書も歌の掲載順が歌人ことであり、さらに、若干のずれはあるものの、生まれ年の古い歌人から順に掲載されているということである<sup>1</sup>。つまり、この歌の並びを通して近代短歌史を学べ、という暗黙のカリキュラムがここにはあるということになる。

そうなるといきおい授業においては、各歌人の来歴を紹介しつつ、短歌史を概観する、といった形をとることになってしまうだろう。これはこれである程度必要なことなのかもしれないが、しかし短歌の単元に併載されている「学習の手引き」や「研究」「表現」「学習」などを見てみると、どうも学習の目標は短歌史を学ぶことだけではないようなのである。明治書院『新高等学校 現代文B』では「好きな歌を一首選んで、二〇〇字程度の鑑賞文を書いてみよう」（明治書院2018 p.122）、筑摩書房『精選国語総合 現代文編 改訂版』では「好きな歌を選び、その歌がどのようなときに詠まれたか、四百字程度で物語を作り、発表してみよう」（筑摩書房2017 p.172）、数研出版『新編現代文B』では「印象に残った歌を選んで、鑑賞文を二百字程度で書き、読み合つて意見を交換してみよう」（数研出版2018 p.77）、教育出版『現代文B』では「好きな短歌を一つ選んで、その感想を四百字以内で書いてみよう」（教育出版2018 p.93）など、つまりここで求められているのは、短歌史などではなく、短歌の鑑賞なのである。

「短歌の鑑賞」とはいったい何なのかという疑問についてはしばらく措く。しかし高校の教科書の中ではどのように短歌の鑑賞を捉えているのかについては、筑摩書房『精選国語総合 現代文編 改訂版』の「羅針盤6 伝統的定型詩の現代 短歌・俳句」というコラムを読むと、その方向性を伺うことができる。

<sup>1</sup> 俳句ではあるが、筑摩書房『精選国語総合 現代文編 改訂版』は、珍しく作者の生年順によらず、句を「春・夏・秋・冬・無季・現代の句」というような形で編集している。

(前略) また一方で、短詩形としての特質からくる凝縮された言語表現は、解釈における幅の広さにもつながる。優れた鑑賞者が作者も意図しなかつた解釈を生み出すことではじめて名句になるといった事態も、その意味で全く不自然ではない。俳句に限らず、他の芸術作品にも同じ要素があるはずである。作者が作品に込めた意図や、内容に沿って鑑賞することは大切であるが、作品世界が鑑賞者の心とどのように響き合うかも重要である。鑑賞者の豊かな感性や創造力が、作品の新たな価値を生み出していくのである。(筑摩書房 2017 p.175)

ここで述べられているのは、まさに読者による解釈の自由についてである。先に挙げた「好きな歌を選び、その歌がどのようなときに詠まれたか、四百字程度で物語を作り、発表してみよう」という課題は、この考えに沿ったものであることが伺える。

ただし各歌人、および短歌史について学び、さらに自分の感想も自由に書いてみよう、という二つの学習目標の両立は、なかなか難しいと感じざるを得ない。

なぜなら「作者」についての知識が読者の解釈を助ける場合も当然ありうるが、しかしその知識が解釈の自由を阻害してしまうこともままあるからである。いや、短歌の初学者であり、試験を意識せざるを得ない高校生にとっては、学習した「作者」の事跡に引きずられてしまい、解釈の自由を阻害される可能性の方がはるかに高いはずだ。

そうになると、歌人および短歌史について学ぶのか、それとも短歌を自由に鑑賞する能力を身につけるのか、どちらか一方に重きを置かざるを得ないということになってくる。今回ここで選んだのは、後者、すなわち生徒が短歌を鑑賞する能力を身につける方である。

しかし現行の教科書にあるように、いきなり鑑賞文を書け、というのではあまりに不親切で、教員も生徒も戸惑って

しまうだろう。だから今回の授業実践では、短歌を鑑賞する仕掛けを生徒に提供するということに主眼を置くことにした。その仕掛けとして採用したのが、平安時代から行われている歌による闘技、うたあわせ歌合である。

歌合とは、歌人たちが左右両陣に分かれ、おもいびと念者と呼ばれるプレイヤーが自陣に属する歌人の作った歌を、どこがどのように優れているのか、さらには相手の歌のどこに難があるのかを言葉を尽くして語り、それを聞いた判者が、左右どちらの歌が優れているのかを判定する「遊び」のことである。『源氏物語』に、絵の優劣を光源氏と権中納言（頭中将）が争う「絵合」の場面が登場してくるが、歌合は、絵ではなく、これを歌で行なうというわけである。この歌合を授業の中で再現しようというのが今回の試みである。

それでは実際、どのようにこの歌合を行なっていったのか、次章以降、詳しく見ていくことにしよう。

## 2 歌合と授業における全体の構成

### (1) 小林恭二『短歌パラダイス』より

先に述べたように歌合は、平安時代以降行われてきた古いものであるが、ここで直接参考にしたのは、一九九六年、小説家の小林恭二が当代きつての歌人二十名を集め、熱海で開催した歌合二十四番勝負である。二十人の歌人たちが「紫チーム」と「くれないチーム」の二手に分かれ、勝敗を争ったのである。ちなみに判者は、短歌、俳句にも造詣が深い詩人の高橋睦郎、非常に贅沢な布陣である。

この勝負の様子は小林恭二(2009)『短歌パラダイス』に採録されており、授業ではまず、このコピーを生徒に配布し、歌合の雰囲気を知ってもらうことにした。以下、その配布箇所をかなり長くなるが引用することにしてみよう。

第一番勝負、題は「海」。司会は小林恭二、判者は高橋睦郎、「紫チーム」の歌は田中槐、「くれないチーム」の歌は井辻朱美が詠んだ。引用部に登場する念者は、道浦母都子、俵万智、岡井隆である。

奪うため破壊するため（力あれ） 海道をゆく倭寇のように

田中 槐

連綿と海老の種族を生みだしてわが惑星のくすくす笑ひ

井辻朱美

（中略）

道浦「紫方の歌は、これから新しい人生に向かう人のための歌ですね。今、綺麗な海が見えますけど、この海道をゆく倭寇のように力強くなつて頑張りましたよという、とても季節にマッチした歌じゃありません？ 素敵ですわ。我が紫チームの先陣に、こんな素敵な歌が出てしまつて、どうしましょ」

小林（司会）「どうしましょつて言われましても（笑い）」

俵「ほんと読んできると力が湧いてくる歌ですよね」

ここまでは紫方だから当然、倭寇の歌を誉める。

岡井「ほんとに力がありますか？（笑い）むしろあの括弧つきの（力あれ）はポストモダン系統なんじゃないかな。僕はあんまり力は感じませんね。むしろ力が抜けてゆく感じ。ま、そこが面白いんですけど、発想の根本は単純だと思う。近代のネガかもしれないけど、近代を超えてはいない」

（中略）

岡井(●)「これに対して井辻さんの歌をよくお読みください。この歌はひじょうに複雑微妙なんです。種族繁榮的発想っていうのは、いまいちばん流行らないんですけど、その流行らないことを敢えて中心に据えながら、きわめてユニークな印象を獲得している。近代を築々と超えているんです」

道浦(●)「お言葉を返すようですが、いま地球規模での環境破壊とか、命の危機がうたわれている中で「くすくす笑ひ」は呑気すぎるんじゃないですか」

岡井(●)「そうかなあ。「くすくす笑ひ」って、なかなか複雑ですよ。「くすくす笑ひ」というのは、単にからかっているわけではなく、はじらいとか照れとかいろいろなものを含んでいると思うんですが」

(中略)

ひよつとしたらものすごく高度な議論が行われているように思う読者もおられるかもしれないが、騙されてはいけない。あくまで念人は、自陣の歌を機械的に誉めているのである。それをいかにも自分の信念にそって弁護したり、論難したりしているかのごとくみせかけているのが各人の芸なのだ。

(中略)

判者の判やいかに。

高橋(判者)「歌合を始めるのにふさわしい両歌だったと思います。僕としては結局のところ……くれないの海老の方をとります。海老の方がイメージとしてはつきりと一つの形象を結んでくるんですね。たぶんに僕の好みがありますけど。海老をとらせていただきます」(小林 1997 pp.14-21)

冒頭に引用されているのが、今回の題「海」に応えて作られた歌である。この歌の作者を「方人<sup>かたうど</sup>」といい、この方人の作った自陣の歌を褒め上げ、相手の歌を論難するのがこの歌合のプレイヤーである。「念者」である。この念者の言葉を聞いて、審判に相当する「判者」が最終的に歌の優劣を決定することになる。

ここで重要なのが、小林が「あくまで念人は、自陣の歌を機械的に誉めているのである。それをいかにも自分の信念にそつて弁護したり、論難したりしているのかのごとくみせかけているのが各人の芸なのだ」と述べている点である。自分<sup>自分</sup>がたとえ、自陣の歌を優れているとは思っていないなくても、褒めるという立場に徹し、相手の歌の方が優れていると思つたとしても、あえて口を極めてけなしていく。つまり、歌合に臨む際には、自分の好みや考えをとりあえず括弧に入れることが必要ということになる。そのようにして歌と距離を取つて「遊び」を作つておかないと、歌をいろいろな方向から眺めることができないし、また念者同士の間<sup>間</sup>に感情的な軋轢を生じさせることにもつながりかねない。この小林たちの歌合をモデルにしたのは、この「遊び」——それは余裕でもあり、同時に遊戯性でもあるわけだが——、それを教室の中に持ち込みたいという思いがあつたためである。遊びつつ、歌について存分に語り、その語ること自体が短歌の鑑賞となる。そのようなことをここでは実践していききたいのである。

ただ、この歌人たちによる「遊び」をそのまま高校の授業の中で実践することは、やはり難しいと言わざるを得ない。この歌合では方人の作った歌をもとに、念者たちが論戦を戦わせていくというものであつたが、それができるのは、その歌がそもそも論じるに足るだけの完成度と力を持つている場合に限られる。初心者<sup>初心者</sup>の生徒に歌を作らせ、その歌を使つて歌合を行なつたとしても、歌合自体が成立しないことも考えられる。ではどのような形で歌合を行なつていけばいいのだろうか。

## (2) 授業全体の構成

ガイドダンス【一時間】

歌を読む【一時間】

好きな歌を選ぶ

←

歌合【六時間】

歌を語る

歌の優劣を判断する

←

歌を詠む【二時間】

歌合は、本来、方人が詠んだ歌を念者が語っていくというものだが、ここではその二つを分け、歌合を歌について語り、歌の優劣を判断する場として限定することにし、歌を作るのは、歌合から切り離して、歌合後に行なうよう変更した。

そして歌合の前には、まずは短歌に慣れるために、近現代の短歌九十首が書かれたプリントを渡し、自分の好みの歌を選んでもらうこととし、あわせてその配布したプリントから歌合で戦わせる歌を選ぶことにした。

☒ 1

時系列で整理すると、まずは近現代の歌を読み自分の好みを把握し、その中から歌合で使用する歌を選んで、次に歌合で歌を語り優劣を判断、最後に歌を詠む、といった三段階の構成ということになる。時間数は、「歌を読む（好きな歌を選ぶ）」を一時間、「歌合」を六時間、「歌を詠む」を二時間とし、これにガイドダンス一時間を加え、全十時間配当とした(図1)。

本校における歌合を中心とする短歌教育は、二〇一八年度、続いて二〇一九年度、二〇一八年度は、文コース(文系クラス)二単位、二〇一九年度は、文理コース(理系クラス)一単位の授業である。それ以前にも「短歌バトル」と称して、短歌を単発的に授業で取り上げることがあったが、短歌教育を歌合の形式に整備し実践したのは、二〇一八年度が初めてである。二〇一九年度は、一八年度の反省を生かし、いくつかの修正を行なった。ここでは、この二〇一九年度の実践を中心に述べていくことにしたい。



### 3 好きな歌を選ぶ

歌合を行なう前に、まずは短歌という形式に慣れておかなくてはならない。生徒は中学校で若干の短歌に触れ、高校では古典の授業の中で和歌を習ってきた。しかしどのような形で習ってきたとしても、教科書のみを教材として使用してきた場合、生徒の目に触れる歌の数はどうしても限られてしまうことになる。この限られた歌の中から、教科書の「学習の手引き」や「研究」「表現」「学習」にあるように「好きな歌を選び、鑑賞文を書こう」としても、好きな歌自体を選びようがない、というのが実情であろう。

そこでも先にも触れたが、この授業では近現代の短歌を九十首用意し、そこから好きな歌を三首選んでもらうことにした。高浜虚子に「選は創作なり」という言葉があるが、選ぶことによつて、「この歌が好きな自分」といった自己が作られていくのではないか。そのような期待も込めての作業である。

実際に生徒が選んだ歌を一人ひとり見ていくと、それぞれが全く違った歌を選び、また選んだ歌にはその生徒らしさを感じられ、これだけでもなかなか興味深いものであった。さらに隣の席の生徒同士で、どのような歌を選んだのか、お互い見せ合うという機会も設けたのだが、楽しそうにおしゃべりしながら選んだ歌を見せ合っていた。

さて生徒に提示した九十首は以下のとおりである。

- 1 思い出の一つのようでもそのままにしておく麦わら帽子のへこみ
- 2 あきかぜの中のキリンを見て立てばああ我といふ暗きかたまり

俵 万智

高野公彦

- 3 あれはママ？私のママよ。ブランコで漕ぐママ風がきらきらしてる。 森 響子
- 4 一度だけ「好き」と思った一度だけ「死ね」と思った 非常階段 東 直子
- 5 こんなにも風があかるくあるために調子つばづれのほくのくちぶえ 山崎郁子
- 6 かの時に言ひそびれたる  
大切の言葉は今も  
胸に残れど  
石川啄木
- 7 美和ちゃんはポエムつくるからポエマーと呼ぶ学生は英文二年 大田美和
- 8 たとへば君 ガサツと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか 河野裕子
- 9 電話口でおつ、つて言つて前みたいにおつ、て言つて言つて言つてよ 東 直子
- 10 体温計くわえて窓に額付け「ゆひら」とさわぐ雪のことかよ 穂村 弘
- 11 終バスにふたりは眠る紫の「降りますランプ」に取り囲まれて 穂村 弘
- 12 制服のスカート上げて河の中ゆく少女らは楽譜のごとし 花山多佳子
- 13 君かへす朝の敷石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ 北原白秋
- 14 口臭はわれかとおもいはつなつの電車こみあうなかのひとりよ 村木道彦
- 15 カマキリはシヨウリヨウバツタの心臓をまず食い破り休息をとる 大田美和
- 16 僕は今、おそらく君の住む街の近くを「あつ」とも言えずに通過 伊藤夏人

- 17 君がふと冷たくないかと取りてより絡ませやすき指と指なり  
角倉羊子
- 18 君ねむるあはれ女の魂のなげいだされしうつくしさかな  
前田夕暮
- 19 私をジャムにしたならどのような香りが立つかブラウスを脱ぐ  
河野小百合
- 20 ごーごーと燃えてる屋敷のきれいさを忘れなまま大人になりたい  
陣崎草子
- 21 きみに逢う以前のぼくに遭いたくて海へのバスに揺られていたり  
永田和宏
- 22 カッコして笑いと書いてマルを打つだけですべてが冗談みたい(笑)。  
梶野浩一
- 23 濁流だ濁流だと叫び流れゆく末は泥土か夜明けか知らぬ  
斎藤 史
- 24 寅さんの看板を見てガキのころ「つらいのやだ」と思つた男  
梶野浩一
- 25 ふかづめの手をポケットにづんといれ みづのしたたるやうなゆふぐれ  
村木道彦
- 26 十四日、才昼スギヨリ、歌ヲヨミニ、ワタクシ内へ、オイデクダサレ  
正岡子規
- 27 あなたとの別れを笑っているような桜が早く散つてよかつた  
大田美和
- 28 うら恋しさやかに恋とならぬ間に別れて遠きさまさまの人  
若山牧水
- 29 次々と涙のつぶを押し出してしまふまぶたのちから かなしい  
笹井宏之
- 30 一日が過ぎれば一日減つてゆくきみとの時間 もうすぐ夏至だ  
永田和宏
- 31 手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が  
河野裕子
- 32 観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生  
栗木京子

- 33 たつぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言へり  
河野裕子
- 34 するだろう ぼくをすてたるものがたりマシユマロ口にはおほりながら  
村木道彦
- 35 さらに象さらば抹香鯨たち酔いて歌えど日は高きかも  
佐々木幸綱
- 36 馬を洗はば馬のたましひ冴ゆるまで人恋はば人あやむるころ  
佐々木幸綱
- 37 信号の赤に對ひて自動車は次々と止まる前から順に  
奥村晃作
- 38 恋人の御腹の上にいるような春やわらかき野のどまんなか  
渡辺松男
- 39 オルゴール部屋に響けり馬場さんよ休め岩田よもすこし励め  
岩田 正
- 40 佐野朋子のばかころしたろと思ひつつ教室へ行きしが佐野朋子をらず  
小池 光
- 41 プリクラのシールになつて落ちてゐるむすめを見たり風吹く畳に  
花山多佳子
- 42 イカ墨のバスタを皿に盛るように洗面器へと入れる黒髪  
麻倉 遥
- 43 夕闇にまぎれて闇に近づけば盗賊のごとくわれは華やぐ  
前 登志夫
- 44 ぞろぞろと鳥げだものを引きつれて秋晴の街にあそび行きたし  
前川佐美雄
- 45 なにとなく君に待たるるこちして出でし花野の夕月夜かな  
与謝野晶子
- 46 清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき  
与謝野晶子
- 47 たとえ足をすくわれたつて気づかない怖れ知らずのこの馬鹿者が  
大田美和
- 48 白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり  
若山牧水

- 49 白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ 若山牧水
- 50 大きな手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるかも 北原白秋
- 51 遺棄死体数百といひ数千といふいのちをふたつもちしものなし 土岐善麿
- 52 あなたは勝つものとおもつてゐましたかと老いたる妻のさびしげにいふ 土岐善麿
- 53 牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ 木下利玄
- 54 総務課の田中は夢をつかみ次第戻る予定になつております 辻井竜一
- 55 わが子とも思えぬものが夢に立ち「早く形にして」と甘える 大田美和
- 56 ラケットで蝶を打つたの、手応えがぜんぜんなくて、めまいがしたわ 穂村 弘
- 57 ふとももに西瓜の種をつけたまま畳の部屋で眠つています 穂村 弘
- 58 指さきのあるかなきかの青き傷それにも夏は染みて光りぬ 北原白秋
- 59 とけかけの氷を右にまわしたりしずめたりまた夏が来ている 加藤治郎
- 60 キッチンにわたし一人が生きていてラップのしたのカレー冷えてく 伴 風花
- 61 呼吸することさえ恋をすることの副作用だとしたらどうする 鈴木晴香
- 62 自転車の後ろに乗つてこの街の右側だけを知つていた夏 鈴木晴香
- 63 君はもう僕には肉の塊だそれなら焼いて煮てかじつてよ 大田美和
- 64 注射針曲がりてとまどう医者を見る念力少女の笑顔まぶしく 笹 公人

- 80 あの夏と僕とあなたは並んでた一直線に永遠みたいに
- 79 あたたかいからだのなかに倒れたいバターナイフがめりこむように
- 78 ちる花はかずかぎりなしことく光をひきて谷にゆくかも
- 77 死にてゆく母の手とわが手をつなぎしはきのふのつづきををとつひのつづき
- 76 こんじきの髪なびかせて「ぐれるにも顔が大事」と笑うトモユキ
- 75 からまつた毛糸を玉にまくように秋はしずかに世界を満たす
- 74 つばくらめ飛ぶかと思れば消え去りて空あをあをとほるかなるかな
- 73 ボケ岡と呼ぶるる少年壁に向きボール投げをりほとんど捕れず
- 72 慎重によけて進むかミサイルで一掃するか迷う人ごみ
- 71 ひらがなつきゃ読めないひとの手をひいてあかるいあかるい月の道です
- 70 金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に
- 69 うたがひはかくて深くもなるものかあまりに人をおもひせまりて
- 68 林檎から始まる君の尻取りに我は今宵もゴリラで返す
- 67 束縛をするならもつと柔らかいシルクのリボンで縛ってほしい
- 66 海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり
- 65 雷に打たれし教師スギモトが「われは仏陀！」と叫ぶ夏の日
- 笹 公人
- 寺山修司
- 久保奈緒子
- 久松洋一
- 九条武子
- 与謝野晶子
- 穂村 弘
- 佐々木あらら
- 島田修三
- 窪田空穂
- 山崎郁子
- 榊野浩一
- 森岡貞香
- 上田三四二
- 吉川宏志
- 木下介介

- 81 年々に我が悲しみは深くしていよよ華やぐ命なりけり  
岡本かの子
- 82 生態系食物連鎖をくつがえしあたしがあなたをたべる日が来た  
小玉裕理子
- 83 二日酔いの無念極まるぼくのためもつと電車よ まじめに走れ  
福島泰樹
- 84 子守歌あなたが歌詞を間違えてもう赤ちゃんは目覚めませんよ  
岡本雅哉
- 85 房総へ花摘みにゆきそののちにつきとばさるるやうに別れき  
大口玲子
- 86 タぐれといふはあたかもおびただしき帽子空中を漂ふごとし  
玉城 徹
- 87 とりあえず出しときますねと安定剤わたしのころはとりあえず病む  
藤田美香
- 88 まっすぐにぶつかつてきてくれるぶん雨は君よりやさしいものだ  
那須 翠
- 89 かみなりに重曹に「ちゃん」をつけて呼ぶ母に「ちゃん」とはついに呼ばれず  
虫武一俊
- 90 四月七日午後の日広くまぶしかりゆれゆく如くゆれ来るごとし  
窪田空穂

歌は種々のアンソロジーや、手に入りやすい個人歌集から、できるだけ幅広く、高校生にとつてわかりやすそうなのを、という基準でとつてきた。並び順には特に意味はない。

これらの歌に対しての評釈は授業において一切行わなかった。本当は、30番永田和宏の「一日が過ぎれば一日減つてゆくきみとの時間 もうすぐ夏至だ」、そして31番河野裕子の「手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が」などについては、いくばくかの説明を加えたほうがよかつたのかもしれない。二人が夫婦であり、死病を

患い余命わずかな河野との「時間」を永田がいつくしみ、河野が最後の力をふりしほって「息が足りないこの世の息が」と、夫である永田へ絶詠を読み遺したのだ、というように。

しかしここでは、生徒が自らの力で歌を選ぶということを優先した。大体、いちいち説明していたら、九十首もの歌は扱えない。授業で説明したのは、せいぜい句またがりについてくらいであった。

さらに、ただ自分の好きな歌を選ぶだけでは面白くないので、クラス全体で人気投票も行なうことにした。自分の一番好きな歌に三点、二番目に二点、三番目に一点といったように点数を付けて投票してもらい、その結果を集計したのである。

この人気投票の際に、生徒には、クラスの中でどの歌が人気なのか、投票結果の予想もしてもらった。自分の好きな歌はこれだけ、みんなはどのような歌が好きなのだろうかと考えてもらったのである。その後、集計結果を見て、自分の好みとクラス全体の好みの違いを知ってもらうというのも、目標の一つであった。

ちなみに生徒に人気だったのは、32番栗木京子「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」、1番俵万智「思出の一つのようでそのまましておく麦わら帽子のへこみ」、21番永田和宏「きみに逢う以前のぼくに遭いたくて海へのバスに揺られていたり」、7番大田美和「美和ちゃんはポエムつくるからポエマーと呼ぶ学生は英文二年」などであった（大田美和は本校の校長でもある。この歌を知って以降、生徒たちは校長のことを「美和ちゃん」と呼ぶようになる）。

以上、歌を読む、というのがこの授業の第一段階である。



#### 4 歌合の時間

##### (1) 歌合の準備

歌合【六時間】
試合準備【一時間】
試合【一時間】
3 ×

図 2

次に第二段階、いよいよ歌合である。歌合には、六時間をあてることにした。歌合は、三試合三セットマッチとし、一試合につき一時間、そのための準備にも一時間をかけた。したがって六時間の内訳は、図2のようになっている。

本来の歌合であれば、歌合に出す歌を作るのが「準備」ということになるだろうが、先に述べたように、いきなり生徒が歌合に出せるような歌を作るのは難しいので、ここでは生徒に配布した九十首のプリントなどから、歌合で戦わせる歌を選ぶことにした。さて、歌合の題は以下の通りである。

第一試合	一セット	題	夏
	二セット	題	異界
	三セット	題	記憶
第二試合	一セット	題	悲しみ
	二セット	題	謎
	三セット	題	少年
第三試合	一セット	題	あるいは 少女
	二セット	題	弱さ
	三セット	題	青春
	三セット	題	恋

基本的には高校生にとって探しやすいような題を選んだのだが、各試合に一つずつ「異界」「謎」「弱さ」などの比較的難易度の高い題も設定した。このような題だと、一見、題とは関係なさそうな歌を、題にひきつけるようなかたちで解釈することになり、解釈自体の重要さがより際立つ結果となった。

さて生徒は、すでに配布されている九十首のプリント、あるいはネット（特に「うたのわ」<sup>2</sup>や「うたよみん」<sup>3</sup>などの短歌投稿サイト）、さらには図書館の蔵書などから題にふさわしい歌を選ぶことになる。ただし、配布したプリントから歌を選ぶときは、選んだ歌がかち合ってはいけないので、左方はプリントの前半から、右方は後半から歌を選ぶことにした。この準備時間では、歌を選ぶだけでなく、歌合の時に使用するメモも作成することにした。そのメモには

- 1 クラス・出席番号・氏名
- 2 題
- 3 選んだ歌、歌人名
- 4 歌意（誰がどのような状況で誰に対して、どのような感情を詠んだか）
- 5 この歌のどこがどのようなようにいいのか

といったことを書いてもらった。歌意は、自由に、時には妄想たくましくしてもかまわない、ただし、その短歌に詠

<sup>2</sup> <http://utanowanet/>

<sup>3</sup> <https://www.utayomin.jp/>

み込まれている言葉に着目すること、という注文を付けた。たとえば、先にも取り上げた、大田美和の「美和ちゃん」はポエムつくるからポエマーと呼ぶ学生は英文二年」などについてある生徒は、「英文二年」の「学生」であるにもかかわらず、大学教授でもある大田を「美和ちゃん」などと呼ぶとはただことではない。この二人の間には恋愛関係があり、その「学生」への想いを詠んだのがこの歌であるという「解釈」を示した。ちなみにこの授業の後で、実際、この「学生」とはどうであつたか、と大田本人に聞いてみたのだが、もちろんそのような事実はないとのことであつた。しかしここでは、作家研究を行なうのではなく、短歌を楽しむ、鑑賞することに主眼を置いているので、このような言葉に即した読みができれば十分なのである<sup>4</sup>。

## (2) 歌合の実際

ではいよいよ歌合本番ということになるが、ルールは以下の通りである。まずはチームの組み方から見ていくことにしよう。

- (1) 二人一組となり、チームを結成。A・B・Cの三チームで合計三回の試合を行ない、一試合は三セットマッチとする。
- (2) 三チームのうち、二チームがプレイヤー（左方、右方＝念者）、一チームが審判（判者）となり、歌合こ

<sup>4</sup> 歌合の時には、このメモを読み上げて発表することは不可とした。言葉が相手に届かなくなるからである。ただ、このメモには生徒が選んだ歌が書かれているので、相手側、そして判者にその歌を見せながら発表するよう、指示を出した。

とに役割を変える。左方が先攻、右方が後攻である。

第一セット A 〓左方 B 〓右方 C 〓判者

第二セット A 〓判者 B 〓左方 C 〓右方

第三セット A 〓右方 B 〓判者 C 〓左方

作戦タイム 【三分】

← プレゼンテーション

左方 【最大一分半】

右方 【最大一分半】

← バトル 【最大四分】

← 判者シンキングタイム

【最大二分】

← ジャッジメント

【一分程度】

3 図 3 から十五分程度、一試合三セットマッチなので、五十分授業だと、ちょうどいい感じで収まる時間配分になっている。二〇一八年の授業では、教員が時間を測って、各ユニット一齐に歌合を行っていたのだが、そうすると時間が余ってしまうユニットも出てくるので、二〇一九年の授業では、それぞれのユニットの判者が時間を測定するようにした。

まず、二人一組でチームを組む。そしてA・B・Cの三チーム六人が、歌合の基本的な本ユニットになる。本来の歌合ならば、何番勝負、という形で進めていくべきなのだが、ここでは三試合三セットマッチという形式でおこなうことにした。一試合が終わるごとに他のユニットとシャッフルし、A・B・C三チームの組み合わせを変えると、さまざまな生徒と対戦できるからである。

この歌合では、二人一組のチームで戦うことになる。したがって、まずはメモを見ながらどのように戦っていくのかを二人で考える作戦タイムを三分間とった。

その後、判者の司会で歌合が開始される。最初にプレゼンテーションである。先攻である左方から選んだ歌を読み上げ、その歌の解釈、そしてどこがどのようによいのかについて語ってもらった。プレゼンテーションというと、どうしてもビジネスの場を連想させるが、ここではむしろ、この歌が好きだ、という感情に論理をのせて、歌について語っていくといった雰囲気であった。このプレゼンテーションの間は、相手方、そして判者は一切言葉をはさまず、耳を傾けなくてはならない。

それぞれのプレゼンが終わると、次は左方、右方双方によるバトルである。ここでは一切の制限なしに、お互いが相手の歌やその解釈に対し難癖をつけ、自分たちの歌がそれよりもいかに素晴らしいかを自由に語っていくのである。ここが歌合の中で一番、盛り上がる場所である。場合によつては四分だと足りないことも出てくるかもしれない。

あらかじめ小林恭二の『短歌パラダイス』を読ませているので、あくまでこれが「遊び」であることを生徒は知っている。そのため、バトルとはいえず、終始、冗談を言い合い、笑いながらの戦いとなつた。いわゆるテイバートとは、雰囲気がずいぶんと異なるものである。短歌の中の語句をおさえながら批判することが原則なので、遊びでありつつも、なかなかの説得力を持つ場合もあり、相手の説に対して、なるほど、と納得してしまう生徒もいた。

しかし二〇一八年の歌合と二〇一九年の歌合とは、若干、雰囲気が異なつていた。一言でいうと、二〇一八年は二〇一九年に比べて、流れが停滞する場面が何度か見られたのである。さらには、一八年においては、バトルにおいて相手の歌を批判することに躊躇を覚えるような生徒も見受けられた。もちろんクラスの成員の違いということも考えられるが、理由はそれだけではないような気がする。

先にも述べたが、二〇一八年は教員が時間を測つて、全ユニット一斉に歌合を行ない、授業の進行は、教員が握つていた。しかし二〇一九年は、ユニットごとに判者が時間を測り、生徒の手によつて歌合が進行していった。一八年、一

九年における一番の違いは、歌合の進行を誰が行うのかということだったのだ。おそらく原因はここにあるのではないだろうか。教員が主導権を握ると、生徒も心のどこかに構えというものができてしまう。それが歌合から「遊び」を失わせ、停滞を招いたのかもしれない。すなわち、歌合を成功裏に収めるためには、教員の介入をできるだけ抑え、教員は歌合という場の整備に注力すべきである、ということだ。

話を元に戻そう。左方、右方のバトルが終わった後は、それを聞いていた判者による評定に移る。判者はしつかりと勝敗の根拠を示さなくてはならず、引き分けもなしにしたので、この勝敗を決めるのが一番難しかったと語る生徒も多かった。

判者のジャッジメントは口頭で行われるため、どのような判を下したのか、特に資料は残っていないのだが、この歌合の後、二つの歌を比べてどちらが優れているか論じよという課題を行なったので、歌合のジャッジメントの代わりに、ここに引用してみることにしよう。

#### 課題

次の短歌二首を比較し、どちらの歌が優れているのか、判を下しなさい（引き分けはなし）。その際、観点を明確にし、該当の短歌の語句を引用しながら論じること。

- A 三匹の子豚に実は天折の父あり家を雪もて建てき  
小池純代
- B 死ぬまへに孔雀を食はむと言ひ出でし大雪の夜の父を怖るる  
小池 光

さてこの二つの歌、生徒はどのように優劣を論じたのだろうか。

【観点：雪】 勝者はA。雪という観点から見ると、Bは「大雪」をあくまで情景としてのみ使っている。これに対しAは、「家を雪もて建てき」と家を雪で建てるというように使われている。これは「三匹の子豚」に出てくる息子たちのわら、木、れんが、と対比させていることがわかる。このようにAの歌は、「三匹の子豚」と「雪」を組み合わせることで書かれていない場面も感じることができ、とても奥深い歌だ。（富島悠介）

【観点：色彩】 まずAの歌からは「子豚」という淡いピンク色と「雪」の白色を感じ取れる。線がはつきりしないようなぼんやりとした印象である。一方、Bの歌には「孔雀」という青や緑の原色が、真つ白な「大雪」の中にいる。もし「父」が本当に「孔雀」を食べたとしたら、興奮のため、その顔には鮮やかな赤色もあらわれるかもしれない。いつ死ぬかわからないという思いでおかしくなった父の狂気と実父への恐怖も色彩をより濃く見せている。AもBも同じ冬の歌であるが、一枚の絵画のように美しい色彩を放ち、現実の冬とのギャップを持つBが優れていると言える。（稲垣瑠納）

実際の歌合では、二分程度で優劣を判断しなくてはならないので、なかなかここまで理路整然と判を下すということではできなかったかもしれないが、歌合での判者の経験が、このような形で表れたということはできるであろう。

どちらの判詞も、まず観点を示し、対立項を明確にした上で、それぞれの歌を論じている。この論の冒頭でも触れた

が、国語の教科書では「学習の手引き」や「研究」などにおいて、生徒に対し短歌の鑑賞を行なうよう促していた。短歌の鑑賞とは何か、それをきちんと定義つけるのは難しいことであると思うが、ただ高等学校という空間に限定するならば、以下のように述べることができるであろう。すなわち、歌から喚起された自らの感情を、他者に伝わるよう論理的に述べていくこと、そしてその実践を通じて、歌に対する自らのテイストを養っていくこと、それに尽きると思われる。この鑑賞の装置が歌合なのである。

さて、このような判が下ったところで一セット終了である。今度はA・B・Cチーム、それぞれ左方、右方、判者の役割を変えて、次のセットに臨むことになる。これが歌合の概要である。

## 5 歌を詠む

### (1) 付け句による作歌練習

ここまでの授業の中で、歌を読み、歌について語り、歌についての優劣を見極める、ということを行なってきた。今度は、歌を詠む段階である。

ただしこの一連の授業の目標は、歌を鑑賞する能力を身につけるといふものであり、その鑑賞する仕組み、プラットフォームこそが歌合であった。したがってこの授業にとつて、歌を詠むというのは最終目標ではない。あくまで歌合の余韻の中で行われるものである。しかし短歌は、実作者と鑑賞者が大きく重なるジャンルでもある。歌を作ることによって、見えてくることもあるであろう。この授業では、作歌をそのようなものとして位置付けてみた。

さて、歌合の余韻があるとはいえず、いきなり歌を作るのは難しいので、まずは「付け句」で練習してみることにした。「付け句」とは、たとえば「めでたくもありめでたくもなし」という下句を提示し、それにふさわしい上句（前句）を詠



んでみるといった江戸時代における雑俳の一種のことである。ちなみにこの下句には「盗人を捕へてみれば我が子なり」という上句が付き、最初から読み下すと「盗人を捕へてみれば我が子なりめでたくもありめでたくもなし」となるわけである。

しかし実際にやってみると、上句を付けるのは、生徒にとっては若干難しいようであった。したがってここでは、上句を提示し、それに下句をつけるといった、いわば「下句付」とでもいうべきものもあわせて行なってみることにした。実際の例を見ていくことにしよう。生徒に示したのは、ある歌の下句、上句を隠した、以下のようなものである。

放課後のドアをあければ匂いたつ

マトリョーシカの中身のように

この上句、下句に対して、生徒は次のようにこたえた。

放課後のドアをあければ匂いたつ俺のことなど知らぬ髪の香

濱田かれん

前ならえ直れで僕ら並びますマトリョーシカの中身のように

高田慶作

傍線部が生徒による付け句である。ちなみにこの歌は、

放課後のドアをあければ匂いたつ絵具まつすぐ君の背を見る

高松紗都子

嘘をつくたびに小さくなっていくマトリョーシカの中身のように

広瀬智深

であった。

ここに挙げた生徒の付け句はともかくとして、実際は、なんだかなあといったものが大半であった。しかし生徒の感想を見てみると、この練習があったから、自分の歌を作るときにあまり抵抗がなかったという生徒も多く、やはり必要な階梯なのであろう。

## (2) 自分の歌を詠む

さてこのような付け句による作歌練習の後、歌を一から作ってみる工程に移った。ただし自由に詠むのではなく、題を決めての作歌、つまり題詠である。

生徒に与えた指示としては、定型を守ることといったくらいである。字余りがすべていけないわけではないが、それは中級者以上のテクニクであり、さらに定型を守ること、自分でも想像しなかつた言葉が、自分の内側から飛び出してくるといった経験をしてもらいたかつたからである（生徒に歌を作らせると、必ず何人かは、「五七五七七」を「五七五七」と詠んでしまうものが出てくる。そしてそのことになかなか気付かないのである。それは詠んだ本人のみな

らず、複数の生徒にチェックさせても同様で、定型意識はすいふんと希薄になっていると感じざるを得ない。  
定型遵守、それ以上の特別な指導をこの授業で行なうことはなかった（というか、筆者は歌人ではないので、作歌の指導はまったくできないのである）。あとはせいぜい、「中二病（厨二病）を恐れないで」とか、「定型があるのだから、詠めばとにかく短歌にはなるよ」とか、精神論にもならない、励まし程度の言葉をかけるくらいだった。  
では、そのような中で生徒が詠んだ歌をいくつか紹介することにしてみよう。

題【思い出】

今殺せかつての愛も優しさも思い出などにしてやるものか

伊藤彩華

題【水】

空と海ばかりを描く恋人に会う日はいつも水色を着る

谷口 央

題【哀】

人間のほとんどは水なんだってだから私も君に溺れる

野島春花

題【恋】

例えばぼくらの星がクリスマスツリーの飾りだったとしたら

高田慶作

せつかく詠んだこれらの歌を、一人だけのものにしてしまうのもつまらないので、まずは六人程度の班を組んで自作の歌を見せ合い共有し、どの歌がいいか、班員全員で選んでみることにした（選ばれなかった歌の中にもいい歌はもちろんあるので、それらは「撰外秀歌」としてプリントにまとめ生徒に配布した。さらにその歌を班代表の歌とし、クラスで人気投票も行なってみた。

この人気投票を行なう際には、自分たちが選んだ班の歌を、歌を詠んだ生徒以外の班員が、どのような歌で、どこがいいのかをクラス全員の前でプレゼンするという形式をとった。歌を作った本人がどのような歌かを説明すると、どうしても恥ずかしがって、歌の良さが他の生徒に届かない。しかし本人以外ならば、しっかりと、時には面白おかしく歌の良さを語ることができる。特に題が「恋」の時などは非常に盛り上がり、中にはクラス全員の前で、自分の恋心を告白してしまう生徒まで現れる次第となった。

## 6 まつめ

そもそもなぜ高校で短歌を教える必要があるのか。いや、授業教等の関係で、結局、短歌を授業で取り上げない学校も、実際は多いことだろう。だから実は、高校で短歌など教えなくても構わないのかもしれない。歌を教え、作らせるというのは、下手をすればクリシエの再生産になりかねないし、クリシエとは、現状に甘んずることもあつて、そのようになってしまうくらいだったら、教えないほうがずっとましである。

しかし、詩は文学の中心であり、そして短歌はまぎれもなく詩の一形態である。詩がいわゆる実用的な文章と異なるのは、解釈が読者それぞれにゆだねられているという点であつて、その解釈の多様さを、詩は詩の本質として宿命のようにはらんでいる。

この歌合を終えての生徒の感想を詠んでみると、「人よつて解釈の仕方が違うのがおもしろい」（佐野宗輝）、「同じ短歌でも、十人十色の解釈があつて、歌合はとても面白かったです」（池田直矢）、「短歌は文字数が少ないからこそ読者が好きなように解釈でき、とても良かったです」（菊田詩織）など、解釈の多様性に焦点を当てるものが多かった。

このような感想を読んでもみると、歌合という仕組みは、詩の解釈の多様性を非常にわかりやすい形で提示し、さらには増幅させるものであるような気がする。

私たちが生きている世の中は多様性に満ちており、その多様性に対応するには、詩をはじめとした文学教育こそが重要なのではないか。歌合の実践を通して、そのような思いを抱かざるをえないのである。

#### 【参考文献、関連URL】

- 教育出版 (2018) 『現代文B』教育出版
- 小林恭二 (1997) 『短歌パラダイス』岩波新書
- 数研出版 (2018) 『新編現代文B』数研出版
- 筑摩書房 (2017) 『精選国語総合 現代文編 改訂版』筑摩書房
- 明治書院 (2018) 『新高等学校 現代文B』明治書院
- 「いたのむ」 (<http://utanowanet/> 二〇二〇年一月二八日情報取得)
- 「いたのむ」 (<https://www.utayomini/> 二〇二〇年一月二八日情報取得)